PBeM『VOiCE』第６回リアクション
06-X　物語の終りとジュブナイルワンダーランド

● Why do the stars glow above?

友だちに会いに行くのならね、と母は言った。おみやげを持っていかなくちゃ。

なにがいいの、と尋ねると、なんでもいいのよと答えた。

なんでもいいよじゃわからないよ、と言うと、気持ちが大事よと返された。

結局、腑に落ちないことに変わりはないが、ともかくおみやげが必要なのだ、と幼い頃の葉柴芽路は思った。今でもそう思っている。友だちと会うということは、おみやげ選びでもあるのだ、と。

がさつだの男っぽいだの、クラスの男子からはよく言われてしまう芽路だったが、それだけに、マナーや行儀作法も勉強しているし、なるべく気を遣うようにしているのだ——ただ、時と場合によって、そうでもない時があるというだけで。

だから、地球の人——そしてM／ヘルヴァがふたつの丘にやってきたと知った時、まっさきに思ったのが、「おみやげ、何にしよう？」だった。

ぐるぐると考えて、ようやく思いついたのが、「古代遺跡」でずっと育てていたノイバラだった。ふたつの丘の原生の花だし、きっと喜んでくれるだろう。

だが、そこで芽路はふと考えこんでしまう。

「これだけで足りるかなぁ」

まだ見ぬM／ヘルヴァの顔を思い浮かべながら、芽路は考える。自宅のまわりは報道陣でいっぱいだが、芽路には大して気にならない。なかば強制的に、市役所内の宿泊施設で寝泊まりするはめになっても、芽路の気がかりはM／ヘルヴァが喜んでくれるかどうか、それだけだった。

そして、ある日ふとひらめいた。

「あたしだ！」

おみやげが足らないなら、足せばいい。

単純な話だ。ふたつの丘で生まれ育って、これまでの思い出や芽路が見聞きしたことすべて、M／ヘルヴァへのおみやげにしよう。

そう考えると、明日の会談が楽しみで仕方ない。芽路は、自分が眠れないとわかっていても、そそくさとベッドに滑り込んだ。そして、ノイバラを受け取ってくれるだろうM／ヘルヴァのことを考えながら、まぶたを閉じた。

● Why does my heart go on beating?

「本はお好き？」

そう問われたのは、もしかしたら初めてだったかもしれない。驚いて顔をあげたのは、声をかけられたことだけでなく、そんな問いかけを受けたからかもしれなかった。

ジャンゴ・リーボリックは、このところ毎日のように図書室に通っている。こまめに本を借りていき、きっちり読んで返す。その繰り返しだ。そのせいだろうか、司書教諭のヴィヴィアン・フェイにも顔と名前を覚えられたのだろう、何気ない様子で話しかけられたのだ。

「えっと、好き、かも」

好きかどうかといわれると、好きでもないような、そうでもないような、いまいち答えが定まらない。

「でも、知らないことがわかるようになるのは、好きです」

本の話じゃないからまずかったかな、と内心ジャンゴが思っていると、ヴィヴィアンは優しく微笑（ほほえ）んだ。

「まあ、素敵」

褒めてもらったのだろうか。ジャンゴはなんとなく気恥ずかしくなって、口を開いた。

「その、かなえたい夢があって、そのためにはわからないことを少しでも減らしたくて……勉強は苦手だけど、でも勉強は必要だから」

隠者の導きがある——そう言ってくれた少女の顔を思い出しながら、ジャンゴは言った。導きがあるとはいえ、歩むのはジャンゴの足であり、探すのはジャンゴの手だ。何もかも隠者に頼ることはできない。だからこそ、わからないことを少しでも減らしたかった。

「テスト勉強だけど、でも、知らないことが知ってることに変わるのは、楽しいです」

ジャンゴの言葉に、ヴィヴィアンはどこか嬉しそうに再び微笑んだ。

「テスト、うまくいきますわ。わたくしが太鼓判を押して差し上げましょう」

タイコバンってなんだろ、とジャンゴは思ったが、すぐには聞き返さずに、ありがたくうなずくだけにとどめた。わからないことがあるなら、調べればいいのだ。それこそが、鉄（くろがね）の冒険王ジャンゴ・リーボリックがあるべき姿なのだから。

明後日のテストに備えて、ジャンゴは再び猛烈な勢いで本を読み始める。その姿を、司書教諭はそっと見守っていた。

■ マスターより

・ご参加いただきありがとうございました。

■ 登場 PC・NPC一覧

【PC】

・葉柴芽路

・ジャンゴ・リーボリック

【NPC】

・ヴィヴィアン・フェイ